

# 文化財を訪ねて — 見てある記 —

## 「大山信仰と道しるべ」



川田谷前領家の大山灯籠

7月下旬からお盆の頃になると、桶川の各所で、写真のように灯籠が灯されます。これは、「大山灯籠」といって、かつて街灯もない時代、大山詣りに行く旅人の安全のために明かりを灯したことから始まった行事です。

大山は神奈川県伊勢原市・秦野市に位置する丹沢山地の霊山で、別名「雨降山」・「阿夫利山」とも呼ばれています。大山阿夫利神社と大山寺が存在し、雨乞いや豊作、豊漁、航海の安全、商売繁盛、出世などの信仰を集める山です。大山に雲がかかると麓の町にも雨が降ります。雨降

山と呼ばれる所以がわかる山です。

この大山信仰は江戸時代、庶民が経済的な余裕を持ったことで、寺社参詣が人気を博し、伊勢参りなどとともに広く関東や東海地方に広がりました。人々は江の島や鎌倉も一緒に巡り、物見遊山をかねて参拝しました。今で言うツーリズムのはしりと言え、参詣者のため「大山道」も整備されていきました。

また、「大山講」（別名「石尊講」といって大山詣りを目的とした地域住民や同業者の集まりも組織されました。大山山麓に居住する「御師」（現在は「先導師」と呼ばれる）という宗教者のもとで檀家として、師檀関係結びました。夏の大山詣りの時期になると、御師の営む宿坊に泊まり、祈祷や参詣の案内を受けました。

市内においてもいくつか講が組織されていました。戦前まで若者たちが集団で大山に参詣して、これをもって一人前と認められる人生儀礼的な意味合いもあったそうです。加えて、講の集まりを通じて、飲食をと

もにすることで住民同士の親睦を深

めながら、交流を図る場でもありました。現在は大山講も、時代とともに行わなくなりつつある地域も増え、信仰を広めた御師自体も減少傾向にあるとのこと。しかしながら、市内各地区で現在も灯籠を建てる行事は続けられ、献灯されています。

ところで、市内では石製と木製の2種類の灯籠がありますが、木製の灯籠は、お盆が終わると「山じまい」といって灯籠を片付けて、次の年まで保管することになります。これはかつて、一般庶民が大山に登山できる夏山開きの期間が、7月下旬〜8月のお盆の終わり頃までだったことに由来するようです。

また、桶川には灯籠だけでなく、川田谷に大山のみちしるべを兼ねた※寒念仏供養塔も存在します。



川田谷の寒念仏供養塔

中央には「寒念仏供養」、右側に

「右吉見 まつ山道」左側には「左川こえ 大山道」と刻まれ、寛延3年（1750）に建立されたとされています。これは道の右に行けば吉見の松山道、左に行けば川越を経由して大山道に行けることを案内しています。桶川だけでなく、こうした道しるべは、さいたま市の「大山御嶽山道しるべ」など、埼玉県内の各所で確認することができます。大山信仰が県内でも広く伝わっていたことを知ることができます。

江戸時代は現代のように詳しい地図や道路標識があったわけではなく、旅をするにも多くの危険が伴いました。ご紹介した灯籠の行事や、寒念仏供養塔の道しるべのように、現代でも、江戸時代の旅人の安全を願う人々の気持ちと、大山信仰の様子をうかがい知ることができます。

※寒念仏とは：1月ごろに山野に出て念仏を唱え、鉦を打ちたたいて家々を回り歩く行事のこと。

9 詳しくは文化財課 ☎786-4000